20240331　イースター・帰天者記念礼拝　Ⅰコリント 15:50～58
「死に対する勝利の歌を歌って」　牧師　中谷美津雄

＜導入＞

イースターおめでとうございます。死者の中からよみがえられたイエス・キリストを讃美し、また、感謝します。讃美するのは、死に勝利して復活することで永遠のいのちの主であることを証しされたからです。感謝するのは、私たちも死んで終わるのではなく、永遠のいのちを持つ希望があることをご自分が復活することで保障してくださったからです。その希望があることが分かるのが、キリスト者の葬儀の時ですね。キリスト者の葬儀には別れの悲しみだけでなく、永遠のいのちを頂いて、天国で再会できる希望と確かな平安がありますね。

ある時、一人の姉妹が、某新聞の切り抜きを見せてくださいました。人生相談の切り抜きでした。

30 代女性会社員から「死が怖くてたまりません。…逃れることができないなら、死を受け入れるためにどうすればよいのか」という相談でした。

この方は「30 歳の時…『死んだらどうなるんだろう』と何となく考え…、自分という存在がなくなって無になるという、真っ暗な深い穴をのぞいたような、どうしようもない絶望を感じ…ぞっとしたそうです。「それ以来、電車の中にいる時や夜寝る前などに、ふとその恐怖がやってくるのです」と心境をつづり、死を誰も逃れることができないのなら、受け入れるためにどうすればよいのでしょうか」という相談です。

回答しているのは、ある生命保険会社の創業者で、現在は某大学の学長をしている方です。

「僕も学生の頃、人間はどこから来て、どこに行くのか、悩んだ記憶があります。でも、今は科学が進み、答えが明確になってきたと思います。人間は星のかけらから生まれ、次の世代のために生き、死んだら星のかけらに戻る。そしてその星のかけらから、新しいものがまた生み出されるのです。

それが事実であれば、人間にできることは受け入れることだけです。…悠久の地球の歴史の中でホモ・サピエンスの登場は一瞬のこと。そのホモ・サピエンスの高度な文明の歴史も一瞬です。その一瞬を精一杯生きる、そのことの方が死を恐れるよりも大切ではないでしょうか。

僕自身は『わからないことは考えても仕方がない』と思っています。10 年後どうなるか、と死を考えるより、晩御飯を何にしようか、とか、今の仕事を楽しむにはどうするかといった、目の前のことに熱中する方が好きなのです。

あなたは会社で働いておられるのですから、どうすれば仕事をもって楽しくできるかと言ったことを、考えてみてはどうでしょう。」

相談した女性はふと襲い来る死の恐怖を持っているのですが、この回答で満足されたでしょうか。尋ねる相手が違っていたと思えたら、それはそれでよかったというべきかなと思いました。

使徒パウロはⅠコリント 15 章で死は終わりではない、キリストにある死者には復活の希望があるのだと教えました。そのためにまず、私たちの罪を赦し清めるために死んで復活されたキリストの福音の本質を確認し、キリストの復活は初穂として復活であって、キリストの再臨の時にはキリストにある死者が復活することなどの神様のご計画を教え、今日の箇所では最後の敵である死に対する勝利の歌を歌って、死者の復活についての話を終わります。

先ほどの女性の悩みに対しては、死んでも、「自分という存在がなくなって無になる」のではなく、また、自分以外の何者かに輪廻転生するのでもなく、イエス・キリストを信じることで罪を赦されて私自身が新しくされて永遠のいのちを生きることができる希望がありますよと、答えることができるのになあと、思った次第です。

＜本論＞

Ⅰ．奥義の告知（50～52）

50～52 節を読みましょう。

50　兄弟たち、私はこのことを言っておきます。血肉のからだは神の国を相続できません。朽ちるものは、朽ちないものを相続できません。

51 聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げましょう。私たちはみな眠るわけではありませんが、みな変えられます。

52 終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちに変えられます。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。

1. 血肉のからだは神の国を相続できない(50)

50 節でパウロは「血肉のからだは神の国を相続できません」と断言しています。「血肉のからだ」、これは、いまこの世に生きている者が皆持っている肉体のことです。これは死によってちりに帰る「朽ちるもの」ですから、永遠に「朽ちないもの」である「神の国」を相続すること、神様から受け取って所有することなど絶対にできません。そう断言した上で、51、52 節で「奥義を告げ」ています。

2. 奥義の告知…再臨の時に起こること(51～53)

奥義には二つの面があります。復活と朽ちないものに変えられることの二つです。

①. 死者は朽ちないものによみがえる…復活

今の時代の終わり、キリストの再臨を告げ知らせるラッパの合図とともに、「死者は朽ちないものによみがえ」ります。「血肉のからだは神の国を相続できません」から、35～49 節で入念に語っていたように、蒔かれた小さな種粒が死ぬことで様々な種類の植物が新しく生きるように、「血肉のからだ」が死に、「御霊のからだ」でよみがえるということです。

②. キリストが再臨されるとき、生きている者がみな朽ちないものに変えられるということです。

51 節でパウロは、「私たちはみな眠るわけではありません」、つまり、皆が死ぬわけではない、キリストが再臨されるとき、生きている者がいると言っています。その人たちは、「終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちに変えられます」、「変えられる」とは、全く別のものになることで、この場合は御霊のからだに変えられることです。

キリストの再臨の時に起こる奥義によって死に対する完全な勝利が実現するのです。今はまだ実現していませんが、主イエス・キリストが初穂として確かに復活してくださった事実によって、再臨の時に起こる死者の復活と朽ちないものに変えられる奥義の確かさを確信することができるのです。そこでパウロは死に対する勝利の歌を高らかに歌います。

Ⅱ. 死に対する勝利の歌(54～56)

1. 勝利の宣言(54、55)

パウロは死に対する勝利を旧約の二つの預言を引用して、まるで勝利の歌を歌うかのように宣言しています。

54 節の「死は勝利に呑み込まれた」はイザヤ 25:8 の「永久に死を呑み込まれる」の預言が成就したことを示しています。

55 節の 「死よ、おまえの勝利はどこにあるのか。死よ、おまえのとげはどこにあるのか」 はホセア 13:14 の預言の成就を指し示しています。「わたしはよみの力から彼らを贖い出し、死から彼らを贖う。死よ、おまえのとげはどこにあるのか。よみよ、おまえの針はどこにあるのか。」

このように、旧約の預言者たちが預言していた死に対する完全な勝利が、キリストの再臨によって実現するというのです。

2. 主イエス・キリストによる勝利の宣言(56、57)

①. 死と罪と律法の関係(56)

56 節でまず、「死のとげは罪であり」と言っています。ここでは、死を恐ろしい毒のあるとげを持つさそりにたとえています。それでも、毒のあるとげを押さえれば、どんなに大きなさそりでも安心できるように、死もとげである罪を押さえれば怖くはありません。しかし、罪を全く犯さないという人、罪を完全に抑えきることのできる人は一人もいません。

更に、「罪の力は律法です(56)」と言っています。その意味は罪は律法によってその力を発揮するということです。言い換えれば、「律法がなければ罪は罪としてみとめられない(ローマ 5:13)」と言うことです。

道路わきに速度制限 50 キロの標識がある道を 80 キロで飛ばせば、

交通違反になりますが、標識がなければ 100 キロで飛ばしても違反にはなりません。それと同じように、罪は律法によってはっきり示されるのです。ですから、罪が分からないという人は、律法をよく知らない人だと言ってもよいでしょう。

②. 主イエス・キリストによる勝利の宣言(57)

57 しかし、神に感謝します。神は、私たちの主イエス・キリストによって、私たちに勝利を与えてくださいました。

主イエス・キリストはただ一人罪を犯さない、つまり律法を完全に全うされたお方でした。それにもかかわらず、十字架にかかって死なれた。それは、ご自分の罪のための死ではなく、私たちの罪を負ってくださったために私たちが受けるべき罪の報酬としての死を私たちに代わって受けてくださったことによるものでした。

しかも、死んで葬られて 3 日目にはよみがえって死に対する完全な勝利を示してくださいました。私たちは、イエス・キリストが私の罪のために死んでくださりよみがえってくださったと信じるだけで罪と死に対して成し遂げられたキリストの勝利を自分のものとして受けることができるのです。ですから、パウロと一緒に「神に感謝します」と叫ぶのです。

Ⅲ. 結論…主のわざに励めとの勧め(58)

1. 誘惑や試練、迫害に負けないようにとの勧め

最初に誤った教えを正し、正しい教理を教え、最後に適用に移って実践的で現実的な勧めをしています。「ですから…堅く立って、動かされることなく」と、パウロは勧めています。いつの時代にも人々の正しい歩みを動かそうとする悪の力が働いています。

コリントの人たちは、パウロが伝えた福音の本質、キリストの死と復活に関わる最も大切な教えを覆す誤った教えに惑わされて、教会を混乱させてしまいました。この問題だけでなく、有名な人の名前を使って分裂を引き起こすこの世の知恵や人間的な思いで混乱させてしまいました。他にもコリントという異教社会の中で性的な誘惑、偶像礼拝に関わる問題など様々な影響を受けてもいました。

教理的な問題だけでなく、具体的な試練や迫害もあったでしょう。たとえ何があっても、「立って、動かされることなく、いつも主のわざに励みなさい」と勧ました。堅く立つためには、強い意志的な決断が必要です。人のことばや人間的な思いに立つのではなく、神のことばの正しい教えの上に堅く立つ信仰から出る意思的決断です。真の神を知らないこの世の流れや、この世の生き方に惑わされない信仰的な決断と目的意識です。すべて神の栄光を現すためにするという信仰的な意思的決断です。

2. そのように勧める根拠は何でしょうか。

「自分たちの労苦が主にあって無駄でないことを知っている」ことにあります。冒頭でお話しした 30 代の女性は「死が怖くてたまらない・・・自分と言う存在がなくなって無になるという…どうしようもない絶望…恐怖」がありました。そうなると、「晩御飯を何にしようか、とか、今の仕事を楽しむにはどうするかといった、目の前のことに熱中する」ようにと言う勧めでは到底満足できません。死に対する勝利がそこにはないからです。

それに対してパウロは主イエス・キリストによって私たちに勝利を与えてくださった神に感謝を捧げた上で、「堅く立って、動かされることなく、いつも主のわざに励みなさい。自分たちの労苦が主にあって無駄でないことを知っているのですから」と勧めています。今を生きて、今を十分に楽しむことができるのは、死に対する勝利を得ているからです。臭いものには蓋をして見ないようにして今を楽しもうとしても、空しさは消えず、心から喜び楽しむことはできません。堅く福音の信仰に立って今をしっかり、そして喜び楽しんで生きる者とならせて頂きましょう。

＜祈ります＞

天の父なる神様。イースターの良き日、御子イエス・キリストが私たちを愛し、私たちの罪を赦すために十字架に死に、三日目にはよみがえって、私たちにも永遠のいのちの確かな希望を与えてくださったことを感謝します。又、先に召された主にある兄弟姉妹たちを偲ぶ記念の礼拝を持つことができ感謝します。ご遺族の方々を初め、ここに集う人皆が、イエス・キリストを信じ、キリストによって与えられる罪の赦しと永遠のいのちの希望を持って、いつも主のわざに励むことができますようにお導きください。主の御名によって祈ります。